

## サテライト型デイサービスへの参加行動に 影響を与えている要因と課題

竹内美由紀\*, 中添和代, 森口靖子

香川県立医療短期大学看護学科

### **Factors and Subjects that Influence to the Participation in the Satellite Type Daycare Service**

Miyuki Takeuchi\*, Kazuyo Nakazoe, Yasuko Moriguchi

*Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

#### **Abstract**

An interview survey was carried out to evaluate factors and subjects that influence to the participation behaviors in satellite type daycare service in the elderly persons. Most of the participants was women and numbers of them were always almost constant. They got information of the daycare service from public relations, friends, neighbors and local cable-network. In most of them, first occasion to attend to the daycare service was call from other participants and having interests in the service programs. Main purposes to participate were to keep relationship with other persons and local area, enrichment of leisure and wish to improve their knowledge. There are some considerations that we must take into account for daycare service: repletion of public relations, place, support system of utilization and organization of society for health promotion of elderly persons with living a useful life.

**Key Words** : 高齢者 (elderly person), デイサービス (day service),  
健康づくり (health promotion)

\*連絡先: 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

\*Corresponding address: Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,  
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0123, Japan

## はじめに

高齢社会の中で長い老後をいかに過ごすかは、個人のみならず社会にとっても大きな問題である。高齢者が生きがいを持ち生き生きと豊かに生活できる地域社会を実現していくためには、地域のすべての高齢者を視野に入れ、介護予防、健康保持、生きがいづくり、生活支援等を行い、総合的な保健福祉水準の向上を図る必要がある。

公的介護保険の開始と同時に、介護予防の視点からも、高齢者の社会的孤立の解消、心身機能の維持向上を目指し、公的なサービスとして高齢者が集う機会を設けたり、地域の中でふれあいの場を提供することなど閉じこもりを防ぐための取組みも各地で行われている<sup>1)</sup>。

M町では、介護保険給付対象外の高齢者に対して、町内8カ所の自治会公民館等において、生きがい活動支援通所事業（サテライト型デイサービス、以下、デイサービスとする）が実施され、地域の交流拠点の一つになっている。利用高齢者の多様な生活背景からも、個々に様々な目的によりデイサービスを利用していると考えられる。

そこで、デイサービス事業開始より約1年半が経

過した現在、デイサービス事業評価も含め、利用高齢者はデイサービスに何を求め、また高齢者の生活においてどのような影響があるのかを知るため、利用高齢者に対して聴き取り調査を実施した。そして、高齢者の参加行動に影響を与えている要因と、デイサービス利用促進に向けての課題について検討した。

## M町高齢者地域ケアシステムの概要

1. M町高齢者地域ケアシステム（図1）
2. 生きがい活動支援通所事業（サテライト型デイサービス）

### 1) 目的

在宅の高齢者に対し、通所により各種のサービスを提供することによって、高齢者の生活の助長、社会的孤立の解消、心身機能の維持向上等を図るとともに、その家族の身体的、精神的な負担の軽減を図ることを目的とする。（M町の委託を受け、M町社会福祉協議会が実施）

### 2) 開催頻度

毎週火・金曜日に町内の自治会公民館の内8カ所をローテーションし、各公民館あたり月1回開

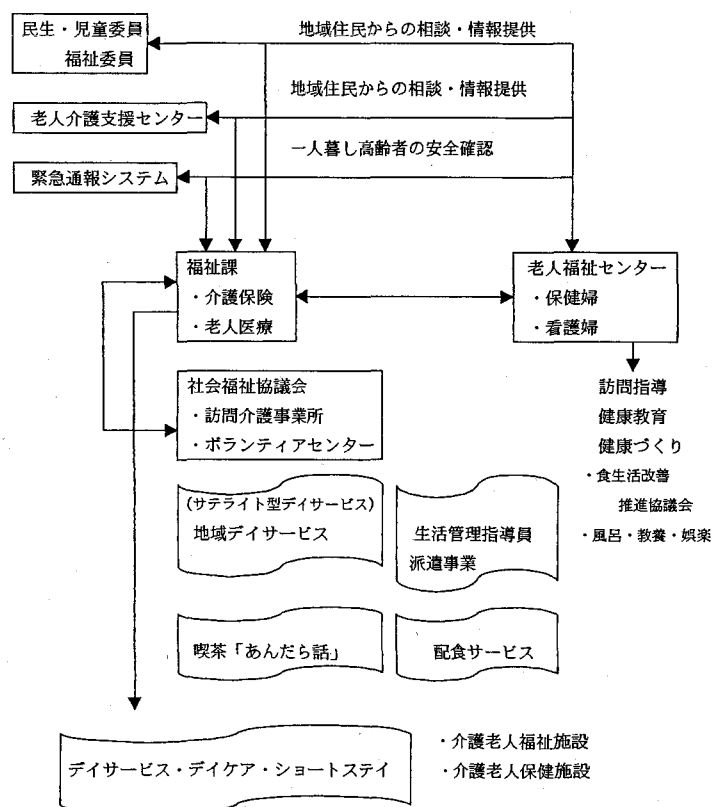


Fig. 1 M町高齢者地域ケアシステム（資料：M町）

催している。

参加費は無料，昼食代のみ400円の実費負担で給食サービスを利用できる。開催時間は9:00～15:00である。

### 3) 対象者

65歳以上の高齢者で，自分で歩いて参加できる希望者である。利用場所は距離的なことも含め利用者と選択し，登録する。

### 4) スタッフ

2名が半年毎に交代する。M町社会福祉協議会主催のホームヘルパー講習修了者である。

### 5) 活動内容

町内外から講師を招き，講演・教養教室・健康教室・手芸・簡単な体操・ゲームなど，午前と午後にそれぞれ毎回プログラムを決めて実施している。

## 調査対象および方法

### 1. 調査対象

各開催公民館毎に該当日にデイサービスを利用していた高齢者112人のうち，調査目的に同意し，かつ有効回答の得られた計109人（回答率97.3%）である。なお平成13年11月1日現在，M町の65歳以上人口3,185人のうち介護保険の要介護認定者数は337人であり，デイサービス登録総数は286人（登録率は65歳以上人口の9.9%）であった。今回の調査対象者は登録者数の39.2%であった。

### 2. 調査期間

平成13年10月19日～12月18日。

### 3. 調査内容

1) 対象者の属性として，①年齢②性別③自治会名④家族構成（「一人暮らし」「夫婦二人」「二世帯同居」「三世帯同居」）⑤利用交通手段⑥所要時間⑦趣味の有無と内容⑧日常生活状況について調査した。

2) デイサービス利用に関するものとして，①利用回数②デイサービス情報源（「近所の人」「家族」「知人・友人」「広報」「民生・福祉委員」「老人会」「防災無線」「その他」）③利用のきっかけ（「誘われた」「時間的余裕」「誰かと知り合いに」「内容に興味あり」「何となく」「その他」）④利用目的⑤利用後の感想⑥希望するプログラムの内容⑦デイサービスに対する意見を調査した。「デイサービス情報源」「利用のきっかけ」の選択肢は，先行研究<sup>2)</sup>により抽出され

た項目及びソーシャルサポートの概念<sup>3)</sup>を参考に設定した。

### 3) 調査方法

デイサービス開催日に，質問紙を配布し，聴き取り調査を実施した。調査項目の「対象の属性」と「利用回数」「デイサービス情報源」「利用のきっかけ」については，自己記入方式で，該当する数字・語句の記入および選択肢より回答を求めた。調査項目の「日常生活状況」「利用目的」「利用後の感想」「希望するプログラムの内容」については，質問紙をもとに，構成面接調査を実施した。さらに，「デイサービスに対する意見」については，全体で自由討議を行い意見を求めた。

### 4. 分析方法

1) 調査項目毎の単純集計および「日常生活状況」「利用目的」「利用後の感想」「希望するプログラムの内容」「デイサービスに対する意見」は，意味内容の類似性により分類した。

2) 高齢者の行動への影響を，老化による健康上の変化としての『年齢』と人間関係の違いからの『家族構成』に注目し，「デイサービス情報源」「利用のきっかけ」「利用目的」「利用後の感想」との関係と比較検討した。（ $\chi^2$ 検定）

統計処理は，SPSS Ver.10.0J for Windowsを用いた。

### 5. 倫理的配慮

本調査の実施にあたっては，対象者にその趣旨，プライバシーの保護，質問に答えたくない時は答えなくてもよいこと，結果の公開について説明し，同意を得た後に実施した。調査項目の一部聴き取り部分は，調査者が実施することで，結果の公平性の保持に努めた。

## 結 果

### 1. 対象者の属性（表1）

参加者の年齢は58歳～88歳で，平均75.5歳（SD=5.7）であった。

性別は，女性90.8%，男性9.2%と圧倒的に女性が多く，男性10人のうち4人は福祉委員であり，高齢者福祉のサポート役割を担っている人であった。

家族構成は，「一人暮らし」が17.4%，「夫婦二人」17.4%であり『高齢者世帯』が約35%であった。また「三世帯同居」が，45.9%と最も多く「二世

Table. 1 対象の属性

		N=109	
		人数	(%)
年齢	(M±SD=75.5±5.7)		
	69歳以下	12	(11.0)
	70～74歳	33	(30.3)
	75～79歳	35	(32.1)
	80～84歳	22	(20.2)
	85～89歳	7	( 6.4)
性別	男性	10	( 9.2)
	女性	99	(90.8)
家族構成	一人暮らし	19	(17.4)
	夫婦二人	19	(17.4)
	二世帯同居	21	(19.3)
	三世帯同居	50	(45.9)
利用交通手段	徒歩	82	(75.2)
	自転車(電動含む)	21	(19.3)
	自動車	6	( 5.5)
所要時間	(M±SD=7.6±6.7)		
	1～3分	32	(29.4)
	4～6分	40	(36.7)
	7～10分	18	(16.5)
	11～15分	11	(10.1)
	16～20分	3	( 2.8)
	21～30分	5	( 4.6)
趣味	あり	86	(78.9)
	なし	23	(21.1)
日常生活状況	野菜づくり	34	(31.2)
	家事	34	(31.2)
	趣味・習い事	12	(11.0)
	花づくり	10	( 9.2)
	手芸	9	( 8.2)
	お寺まいり	3	( 2.8)
	孫の世話	3	( 2.8)
	ボランティア	3	( 2.8)
	何もしない	10	( 9.2)
	無回答	13	(11.9)

代同居」19.3%を合わせると『子供と同居世帯』が約65%を占めていた。

利用交通手段では、94.5%が徒歩又は自転車家族の介助なく自分の力で参加していた。

開催場所までの所要時間は、平均7.6分(SD=6.7)で、82.6%が「10分以内」であった。「近くだから参加できる」という意見が多くあった。30分かけて参加している人の意見では、「健康のため友人と共に歩いて参加している」であった。

趣味の有無では、何らかの「趣味あり」が78.9%であった。趣味の内容は多種多様であり、「花づくり」「野菜づくり」「手芸」「カラオケ」が多く、身体活動から文化教養活動まで幅広く取り組んでいた。

日常生活状況は、「野菜づくり」「家事」が31.2

Table. 2 デイ サービス利用状況

		N=109	
		人数	(%)
利用回数	1～6	28	(25.7)
	7～12	22	(20.2)
	13～18	59	(54.1)
ディサービス情報源	広報	34	(31.2)
	老人会	29	(26.6)
	近所の人	24	(22.0)
	知人・友人	23	(21.1)
	防災無線	23	(21.1)
	家族	17	(13.8)
	民生・福祉委員	11	(10.1)
	町の職員	2	( 1.8)
利用のきっかけ	誘われて	46	(42.2)
	内容に興味があり	44	(40.4)
	何となく	26	(23.9)
	時間に余裕があり	15	(13.8)
	誰かと知り合いに	10	( 9.2)

Table. 3 利用目的と利用後の感想

		N=109	
		人数	(%)
利用目的	人と会話をする	52	(47.7)
	楽しく過ごしたい	24	(22.0)
	新しい知識を得る	19	(17.4)
	ボケ防止	18	(16.5)
	のんびりストレス解消	9	( 8.3)
	食事が楽しみ	4	( 3.7)
利用後の感想	良かった	106	(97.2)
	どちらでもない	3	( 2.8)
「良かった」内容 n=106	人と話ができる	51	(46.8)
	楽しく過ごせる	23	(21.7)
	知識が得られる	21	(19.8)
	自由にゆっくりできる	10	( 9.4)
プログラムの希望内容	講演など話を聞く	40	(34.5)
	手芸	28	(24.1)
	簡単な体操	17	(14.7)
	ゲーム・遊び	10	( 8.6)
	遠足	8	( 6.9)
	カラオケ	7	( 6.0)
	料理	6	( 5.2)

%,「趣味・習い事」「手芸」など、多くの者が何らかの活動を行っていた。また「ボランティア活動」を行っているものが3人(2.8%)いた。反面、「テレビを見るだけでなにもすることがない」が10人(9.2%)いた。

## 2. デイサービス利用状況(表2)

### 1) 利用回数

調査期間中の利用回数、平均12.9回であり「はじめて」は4人(3.7%)であった。「18回」と事業スタートからの毎回利用者が57人(52.3%)で最も多く、12回以上が72人(66.1%)で、

Table. 4 家族構成とデイサービス情報源・利用のきっかけ

人数(%)							
情報源 年齢	近所の人	家族	知人・友人	広報	民生・福祉委員	老人会	防災無線
高齢者世帯 38(34.8)	5(13.5)		5(13.5)	16(43.2) *	8(21.6)	5(13.5) *	6(16.2)
子供と同居 71(65.2)	19(26.4)	16(22.2)	18(25.0)	18(25.0)	3(4.2)	24(33.3)	17(23.6)
きっかけ 年齢	誘われた	時間の余裕	誰かと知り合いに	内容に興味あり	何となく		
高齢者世帯 38(34.8)	14(37.8)	7(18.9)	4(10.8)	18(48.6)	5(13.5) *		
子供と同居 71(65.2)	32(42.2)	8(11.1)	6(8.3)	26(36.1)	21(29.2)		

\* p&lt;0.05

参加者の固定化現象が見られた。

## 2) デイサービス情報源 (複数回答)

「広報」が31.2%で最も多く、次いで「老人会」が26.6%,「近所の人」が22.0%,「知人・友人」「防災無線」が21.1%であった。

## 3) 利用のきっかけ (複数回答)

「誘われて」が42.2%と最も多く、次いで「内容に興味あり」が40.4%,「何となく」が23.9%であった。

## 3. 利用目的と利用後の感想 (表3)

### 1) 利用目的

「人との会話や交流を広げる」が47.7%で最も多く、次いで「楽しく過ごしたい」が22.0%であった。その他、「新しい知識を得る」「ボケ防止」などがあげられた。

### 2) 利用後の感想

「人との会話や交流が広がる」が46.8%と最も多く、「楽しく過ごせる」21.7%,「知識が得られる」「自由にゆっくりできる」であった。

### 3) 希望するプログラムの内容 (複数回答)

デイサービスで実施したい内容については、「講演などの話を聴き知識を得たい」が34.5%で最も多く、次いで「手芸」が24.1%,「簡単な体操」が14.7%などであった。

## 4. 『年齢』『家族構成』と「デイサービス情報源」「利用のきっかけ」「利用目的」「利用後の感想」との関係 (表4)

### 1) 年齢別比較

対象である高齢者を、今回はさらに75歳を境にして前後に分け、前の方を前期老年期とし、後の方を後期老年期とする立場を採用し、74歳以下と75歳以上の2群に分け比較検討したが、両群に年齢別による有意差はなかった。

### 2) 家族構成別比較

家族構成を「一人暮らし」「夫婦二人」の『高齢者世帯』と「二世帯同居」「三世帯同居」の

『子供と同居世帯』の2群に分け比較検討した。

デイサービス情報源では、高齢者世帯は「広報」が一番多く、次いで「民生・福祉委員」「防災無線」の順であった。子供と同居世帯では「老人会」が一番多く、次いで「近所の人」「広報」「知人・友人」の順であった。高齢者世帯に「広報」が有意に多く、また子供と同居世帯に「老人会」が有意に多かった。(p<0.05)

利用のきっかけでは、高齢者世帯は「内容に興味あり」が一番多く次いで「誘われた」であった。子供と同居世帯は「誘われた」が一番多く次いで「内容に興味あり」「何となく」であった。子供と同居世帯に「何となく」が有意に多かった。(p<0.05)

利用目的・利用後の感想では、両群に有意差はなかった。

## 5. デイサービス利用に関する意見

自由討議のうち、利用に関する意見を抽出した。

1) はじめて参加した者の意見では、「連れがあるほうが参加しやすい」「同年代同志で話しが合う」「誘ってくれたり、講演を聞くなどきっかけが必要」「関心はあったが自分にあうか心配だった」であった。

2) 利用促進への意見では、「次回の内容がわかると勧めやすい」「近所の高齢者に声はかけている」「近くであれば参加したい」「毎日定刻にある防災無線が有効」であった。

3) 利用減少・停滞に関する意見では、「男性はボランティアの会に出席するほうが多くデイサービスのプログラムでは興味がない」「途中から入りにくい」「足腰が悪い人には、声をかけづらい」「近くに新しい団地もあるが交流はない」であった。

## 考 察

### 1. 利用高齢者がデイサービスに求めるもの

利用目的を調査すると、約50%の者が人との会話や交流を広げるといった「友人や地域とのつながり」を求めている。また、楽しく過ごすやストレス解消という「余暇の充実」への関心の高さもあり、新しい知識を得るというような、「趣味」「生涯学習」への要望の高まりも見られた。これら利用目的は、日常生活で満たされていないニーズともいえ、また高齢者が直面している日常生活上の問題ともいえる。高齢者の避けることができない身体機能の衰えに対して、できるだけ周囲の人や地域との繋がりや学ぶ姿勢を持ち続けたいという要望は、社会の中での自己の存在価値や仲間集団の中での精神的安定、ボケ防止に向けての心身刺激の必要性の現われといえる。

さらにプログラムの希望内容として、健康の保持増進に向けての知識を得たいという精神・心理面の希望に加え、体操・ゲーム・遊び・遠足など身体的健康・身体機能の保持に働きかける内容の希望が多くみられた。このことより、人との対話だけでなく、健康の保持増進に向け無理のない身体活動への要望が理解できる。高柳<sup>4)</sup>は、高齢者の孤独の対処行動として、対人接触の必要性和、対人接触の対象として、孤独高齢者に共感できる人物が適当であると述べている。同じ時代を生きてきた同年代の高齢者同志が集まり話しをしたり、ゲームをする、この同じようなレベルというのが共感性を増し、自分の居場所や能力を発揮できる場になっていると考える。

### 2. デイサービス利用効果と生きがいづくり

今回は、生きがいは生きる喜びであると広く定義する立場をもとに考える<sup>5)</sup>。人によって生きる喜びを与えるものはさまざまである。人の価値観も千差万別であり生きがいを構成するものも相互に入り組んでいるといえる。さらに、高齢者は人生経験もさまざまで、想像もできないほど大きな違いを持っている。心身の衰弱のほかに仕事の中断、経済的困難、近親者・友人特に配偶者の死、地位や名誉の喪失、子供の離反などさまざまな喪失体験も経験する。これらの困難を克服し生きる喜びを見出すには、中心となる“生きがい”が大切である。

生きがいや日常生活の満足度の概念を定める時、「家族」「健康」「趣味・娯楽」「社会参加」

「対人関係」「生涯学習」などが生きがいに繋がるという先行研究が多くある<sup>6~9)</sup>。今回デイサービス利用後の感想の内容から、サービスの利用が生きがいづくりに影響しているか否かを検討した。利用後の感想では、給食サービスの味付けへの不満は少しあるが、ほとんどの者が「良かった」と回答し、約50%が人と話したり交流が広がる利用効果を述べていた。その他楽しく過ごせるや知識が得られるなど、ほぼ利用目的と同一な内容のものであった。同世代との会話や交流は寂しさや孤独を感じさせない環境の中にいるということであり、楽しいという感情的満足に自分の居場所・存在を他の人に認められるという社会的満足にも繋がっているといえる。また、新しい知識を得たいという者にとっては、毎回の工夫を凝らした様々なメニューより、知識を得られたという満足度が高まり、自由に話したり、楽しくすごせることがストレス解消の場になっているといえる。このことより、利用目的と利用後の感想からも利用目的はほぼ達成され、生きがいづくりに有効に作用しているといえる。

### 3. 利用高齢者の参加行動に影響するもの

利用者の約50%が事業開始からの参加者であった。このことは、デイサービスには長期間継続できる魅力があると考えられるが、反面、新しい人が増えてこないという、参加者の固定化現象があるともいえる。サービスの公平性、住民ニーズに即したサービスの提供面から考えても、利用促進に向けて高齢者の行動及び意思決定に関する要因の検討の意義は大きいと考える。今回、高齢者のデイサービスへの参加行動に影響を与えているものとして、高齢者のニーズである利用目的の他に、デイサービスという事業があるという情報源の周知と直接参加動機となる利用のきっかけに注目した。

デイサービス情報源としては、「広報」が一番多く特に高齢者世帯においては有意に高かった。次いで「老人会」からの情報が多く見られた。老人会については地域差が大きく、老人会活動が活発な地区においては有効に作用しているといえた。その他情報源としては、「近所の人」「知人・友人」「家族」という“人”を介しての情報が約20%みられた。西川<sup>10)</sup>は、同程度の支援を受けた時、高齢者では配偶者からの社会的支援の影響が非常に大きく、次いで子ども、親戚その他であり、否定的対人関係は、精神的健康に悪影響を及ぼす

と述べている。今回の調査では、三世代同居・二世世代同居が多く、約65%を占めていた。危機的状況時の支援や精神的健康から考えると、家族からの支援は好ましい状況といえる。しかし夫婦二人暮らしで、家族である配偶者からの情報がなかった。これは利用者の約90%が女性であることより、また自由意見にもあるように男性はデイサービスよりボランティアの方に関心が強いという男性のデイサービスに対する関心の低さに因るものと考えられた。だが多くの女性が夫のこころよい同意を得て参加していることより支援がないのではなく、お互いが自由に自分らしく過ごせる場所や時間を尊重していると考えられる。その他、古くからの地域的なつながりも作用し、友人・知人からの情報も多く、日常から周囲との対人関係を持っているといえる。さらに、一人暮らしでは、民生福祉委員からの情報が多いことより、地域で支える町づくりの機能が働いているといえる。

町の配布している広報のほか防災無線が有効に作用していた。M町では、毎日朝・夕2回定刻に行事予定の放送がある。この放送は家庭にいて町のことがわかる大切な機能を果たしているといえる。その他は、町から独居および高齢夫婦世帯の在宅老人への見守りのため訪問にきた町の職員からの情報であった。社会的にも今後このような一人暮らし・夫婦二人暮らしの世帯の増加が予測される。対人交流の少ない高齢者に対する情報の提供と、地域の高齢者との交流の場とをつなぐパイプ役としての専門職の役割・機能が重要になるといえる。ソーシャルサポート（以下、社会的支援とする）は、高齢者の身体的・精神的機能の低下を防ぐ重要な要因のひとつとして考えられている<sup>11)</sup>。特に高齢者の健康を考える上で、この社会的支援と精神的健康の関係は重要といえる。

利用のきっかけでは、各年齢層で「何となく」がみられた。特に子供と同居世帯で有意に高く、高齢者の多くは定年による社会的な役割の喪失に加え、家庭内役割は子供などの家族に移り、身体活動能力の低下も避けられず、趣味・活動なども制限され日常生活における明確な目標なく日々を過ごしている人が多いといえる。周囲との交流も減少しともすれば閉じこもりがちになる日々である。このような状況で周囲に勧められ何となくでも参加することが、閉じこもりの防止となり、人との交流が新たな楽しみになり活動も広がり、生きがいづくりにも繋がるといえる。

今回利用のきっかけで一番多かったのは「誘われて」と、「内容に興味あり」であった。デイサービスの豊かなプログラムや、属性の「趣味あり」が約80%からも、いろいろやってみたいという欲求の現れになっているといえる。また、「誘われて」では、多くの参加者が知人・友人の勧誘により、実際参加している事実が明らかになった。友人・知人に誘われたという影響力は強く、友人・知人と共になら、多少時間はかかっても会場まで健康のために歩いてやってくるという、所要時間や利用手段との関連も明らかになった。

以上より、参加行動に影響のある要因として、開催場所の問題などハード面を除くと、自分一人の意思決定で参加しているというよりは、知人・友人・家族・地域の委員からの影響力が作用して、利用に至っているといえる。Kaplan<sup>12)</sup>が、50歳以上の様々な年齢群において、人と会う回数、社会ネットワークへの参加が少ない人の方が死亡危険度が増加するのを指摘しているように、参加することが精神的な健康だけでなく、身体的な健康にも有効に作用しているといえる。

#### 4. デイサービス事業としての今後の課題

##### 1) 参加についての手段や開催場所の検討

事業としてどのように発展させて行くかの検討は重要である。自由意見からも近くだから参加できるとの意見がある。このことから高齢者が自分で歩いて参加できる開催場所の選定が今後の課題といえる。

##### 2) 利用者の固定化現象への対応

新しい参加者にとっては、今まで育ってきた集団の中に、新たに一人乗り込んで、自分の居場所を確保しなければいけない場にもなりうる。一方では安心できる場所であり、一方にとっては緊張を強いられる場所でもある。はじめて参加したもの全てが、この新しい場所への利用導入期の不安を訴えていた。寺田<sup>13)</sup>は、日本の高齢者の社会的性格をめぐる特徴として、仕事に関連する社会交流が主であって、退職しても地域住民との交流は消極的である。それは過去において、地域社会の一員として地域活動に参加する経験が絶対的に乏しかったことに起因していると述べている。これは今日の日本社会全体の課題であるといえる。一時期、子育て母子の交流の難しさとして、公園デビューという用語が流行したが、まさにその高齢者版、公民館デビューの難しさが浮き掘りにされたといえ

る。今後、このような高齢者の心理を理解しての関係者の対応と利用導入期に対する専門職のサポート体制の整備が必要である。さらに、高齢者と地域社会との間で積極的な交流を進めながら、一人の人間として、地域住民として新たな地位と役割を獲得できるよう、同世代さらに世代を超えた地域住民との共存・共生をめざす社会づくりが必要である。

## 結 論

高齢者のデイサービスへのニーズと、参加行動に影響を与えている要因およびデイサービス利用促進に向けての課題を明らかにするため、聴き取り調査を実施し以下の結論を得た。

1. 利用者は、圧倒的に女性が多く、利用者の固定化現象がみられた。
2. デイサービス情報源では、「広報」「防災無線」「知人・友人」「近所の人」が多く、頻回の広報活動と身近な人からの情報が有効であった。
3. 利用のきっかけでは、「誘われて」と「内容に興味があり」が多かった。自分一人の意思で参加するよりは、知人・友人・家族・地域の人からの影響力が作用していた。
4. 利用目的では、「人や地域とのつながり」「余暇の充実」「学習への欲求」が高く、デイサービスの利用は生きがいづくりに作用していた。
5. 今後の課題として、広報活動の充実、開催場所の検討と利用導入期のサポート体制の強化、高齢者が健康で生きがいを持って生活できる地域づくりがあげられた。

## おわりに

本研究目的である、デイサービスへの参加行動に影響を与える要因と課題では、対象の属性と情報源・利用きっかけの関係性を明らかにすることによって一定の結果が得られた。しかし対象者が参加している者であり、また全ての参加登録者に調査していないので結果の一般化は難しい。対象の背景・地域性・スタッフ側の因子も含め、今後、より大きな

サンプル数を用いた調査を行い、参加行動に影響を与えている要因の検証をしていきたいと考える。

## 文 献

- 1) 厚生省監修(2000)“厚生白書(平成12年版)新しい高齢者像を求めて”, ぎょうせい, 東京, p.63-83.
- 2) 竹内美由紀, 中添和代, 森口靖子(2002)喫茶『あんだら話』と健康づくりプログラムのない地域デイサービス. 四国公衆衛生学会雑誌, 47:47-48.
- 3) 西川正之(2000)“援助とサポートの社会心理学”, 北大路書房, 京都, p.27-28.
- 4) 高柳和江(2001)高齢者の孤独と孤立を理解する. 月刊総合ケア, 11(6):40-45.
- 5) 石井毅(1993)高齢者の生きがい. 臨床精神医学, 22:671-676.
- 6) 佐藤林正, 米林喜男(1997)健康づくり活動にいける「住民主体」の意味に関する研究, 第3回「健康文化」研究助成論文集, p.7-18.
- 7) 森重美奈子, 小川敬子, 根本和枝, 村上満子, 松原哲, 梶山純一他(1998)健康づくりコース参加者のライフスタイルと健康度. 高齢者の充実感・生き甲斐有無別中心に. 東京都老年学会誌, 4:167-171.
- 8) 松田晋哉, 筒井由香, 高島洋子(1998)地域高齢者のいきがい形成に関連する要因の重要度の分析. 日本公衆衛生雑誌, 45:704-712.
- 9) 村上明美, 川越清子, 大沢正子, 近森栄子, 西川千歳, 中野悦子他(1995)都市における高齢者のQOL(3)-生きがい活動と主観的幸福感との関連-. 神戸市立看護短期大学紀要, 14:141-152.
- 10) 西川正之(2000)<sup>3)</sup>. p.29.
- 11) 野口裕二(1991)高齢者のソーシャルサポート:その概念と測定. 社会老年学, 34:37-48.
- 12) Kaplan, A. G.: Behavioral, psychosocial and socioeconomic determinants of health in an aging population. 日本公衆衛生雑誌, 47(11):50-52.
- 13) 寺田晃, 佐々木秀忠(1996)熟年からのメンタルヘルス・エッセンス 老いところ, 日本文化科学社. 東京, p.55-92.

受付日 2002年1月18日